

ありむら ひるゆき
有村 博幸

情報労連・副委員長

N T T 労働組合・事務局長

次代を捉え、変わる勇気を！ ＜次代へチャレンジ＞

一時、人気が下降線をたどりつつあったいくつかのプロスポーツが、にわかに脚光を浴び面白くなってきた。それは、私が個人的に好きなプロスポーツがたまたまそうなったのかもしれないが、ここ1～2年スポーツ新聞やスポーツニュースを見るのがこれまで以上に楽しみになってきた。

その一つは、プロゴルフ。特にシニアゴルフは、同世代が参加資格の年齢に達したことも影響しているのかもしれないが、中高年がほんとうに頑張っていて見ごたえがあり面白い。勢いをかけてレギュラーツアーでも多くのシニアプロが活躍しており、先日の「中島常幸プロ」の優勝は、あっぱれであった。女子プロゴルフは、一時、人気 downstairs スポンサーが次から次に退き試合数の減少が続いたが、今やそんな時期があったことなど信じられないくらいの人気である。若い選手の台頭は凄いものがあり世界のトッププロと堂々と戦える実力が実証されている。男子プロゴルフも世代交代とともに女子とは違った豪快さが面白い。また、一方で選手会を中心に試合前後のゴルフ教室や気軽なサイン会など積極的なファンサービス、ファンへのアプローチが試合観戦者数の記録更新やかつては考えられない多くのボランティアの皆さんによる大会運営へと繋がったのでは・・・。

もう一つは、プロ野球。人気のセ・リーグ、実力のパ・リーグと言われた時代があったが、今は大きく変わったと感じる。全国的なテレビ中心で楽しむ野球から、地域密着型の野球になってきた。昔から阪神タイガースは、地域密着型（今は全国にファンがいる？）の代表であったが、パ・リーグを含めて地域と球団が一体化してきた。セ・パ交流戦の影響やWBCの影響は大きかった。日本人選手のメジャーへの挑戦もまた大きかった。今まであまり見たことのないチーム同士の対戦、セ・パ・メジャー一体となった日本代表チームの活躍、そして、九州のチームや北海道のチームの優勝、それまで野球を知らなかった人まで、九州や北海道や東北でファンとチームが一体となってゲームを楽しむようになった。野球観戦のテレビ視聴率が下がったと言われるが、それは全国放送のことであり、地方におけるテレビ視聴率や観客動員はどうなのだろうか。新たなファン層が大きく広がりつつあることは間違いないだろう。様々な取り組み、努力を行い変わろうとしてきたいいくつかの球団や選手会に大きな拍手を送りたい。

二つのプロスポーツについて触れたが、共通しているのはファンを大事にする姿勢であり、それぞれの選手のひたむきな努力とそれを支える目に



見えない周りの支援ではないだろうか。形はそれぞれ違って過去の良い時代の「遺産」、ともすれば過去の経験に頼ったあり方から脱却する勇気があったからではないだろうか。何事にも時代の終わりは必ず来るし、その変化を如何に冷静に受け止め対応するかが重要なのではないだろうか。危機を乗り越え新たな時代が作られる時、これまでも増して、新たな面白さがファンを魅了し引き付けて離さない。

どの世界にも一定の期間が過ぎれば乗り越えなければならない課題と時期が来ると思う。

必要なのは、変わらなければならない時を受け止め変わる勇気である。そして、それを乗り越えた強さが大きく成長するきっかけとなると信じている。

組合組織率の低下、周りを見れば、多様化する労働者の急激な増加。じわじわと「いつの間にかこんなに進んできたのか」と疑いたくなるような、「グローバル化とコスト競争力」の名のものと進展である。

我が『情報通信業界』も技術革新の急激な発展のもと、規制の緩和、市場競争の導入等などが続き、経営形態の見直しから事業運営の各種施策の展開、アウトソーシング化が進められてきた。そ

して、その中で労働組合として『雇用の安定と確保』を第一義に懸命に取り組んできた。

今、労働力構成は約三分の一がパート有期契約労働者となっている。組織化の取り組みは、労働組合にとっていつの時代も大事なこととして進めてきた。しかし、多様化する雇用形態や労働条件の中での取り組みは、従来の発想だけではなかなか難しいものがある。

雇用の多様化が進み労働関係法の見直しが大きくクローズアップされてきている。正規社員・非正規社員が一体となった政策が必要であり、更なる格差拡大に繋げないためにも、社会全体の取り組みの中で、新たな発想で労働運動を進める時にあるように感じている。

職場の中で、少々後手後手となっている処遇改善や組織化の取り組みは、大変な力仕事であるが、あらゆる労働者に対する心のこもった取り組みは、労働組合の社会的役割である。一步一步出来るところからの新たな取り組みの積み重ねが、強さに繋がると信じて進んで行きたいと思っている。次代へつなぐシニア世代の一人として。